

娘である。惟直はイタリアに留学、1876年にはヴェネツィアにおいて日本語教授として教鞭を執っていた。惟直はマリア・ジョヴァンナ・セロティと出会い、1877年9月10日に豊が誕生する。翌年、惟直は25歳で壊血病にて永眠（サン・ミケーレ島に眠る）、その後マリアも亡くなったため豊は祖母に育てられていた。

惟直の兄弟達はイタリアに惟直の娘が残されていることを知り、緒方取二郎と緒方正清は豊を迎えにヴェネチアまで訪れ、日本に連れ帰った。豊が14歳の時である。

緒方家に迎えられた豊は最初、適塾に住んでいた。豊は梅花女学校に通い日本語を学び日本文化に馴染めるよう努力した。その後、加陽家より光太郎を養子として迎え緒方家の一員として2男4女の母として遅く生き90歳で亡くなった。

以下は、私自身（緒方洪庵から7代目）が血縁者に行ったインタビューの一部である。『豊は日本文化に馴染もうと努力したが、当時としては珍しくパスタをうどんより好み、孫たちを出迎えるときは「だっこ」ではなく「ハグ」をして「頬ずり」ではなく「キス」をする』という西洋の風習も当然持ち合わせていたようだ。また当時は混血（ハーフ）が珍しかったため奇異の目で見られ苦勞も絶えず、六甲の教会に通い心の拠り所にしてきたようである。

血縁とはいえ知らない日本人が突然自分のもとに現れて、日本に連れ帰られ一緒に暮らすという



左から緒方取二郎、豊、緒方正清

のは14歳の少女にとって大変な恐怖と不安であったことは想像に難くない。豊が素直にそれに応じたのか、あるいは嫌だったが仕方なく日本に行く決断をしたのかは分からない。しかし、その時の勇気がなければ、私はこうして日本医史学会で発表する機会もなければ生まれてもいないと思うと感慨深い。

（令和4年9月例会）

研医会図書館の蔵書案内

安部 郁子

研医会図書館は、眼科資料の図書館として知られているが、実はその書庫には眼科以外の書籍も多く、今回はそうした研医会の所蔵本についてご案内したい。

ご紹介の手がかりとして、2006年から2019年にかけて行なってきた本の展示会のリストを見ていただき、どのようなジャンルの書籍・資料があ

るのかをお知らせする。以下は、その展示会のタイトルである。

- | | |
|--------|--------------------|
| 2006年春 | 明治人の教科書 |
| 2007年春 | 江戸の特産品開発 本草学と博物学の本 |
| 2008年春 | 幕末から明治の翻訳医書 |

2009年春	傷寒論とその関連本	1
2010年春	傷寒論とその関連本	2
2010年秋	解剖学と人体図の本	
2011年春	傷寒論とその関連本	3
2011年秋	鍼灸の本 ー鍼灸や経絡、瘍科も含む鍼の書籍紹介ー	
2012年春	江戸時代の眼科の本	
2012年秋	森立之と関わる本	
2013年春	食養生の本	
2014年春	本でたどる眼科の歴史	
2015年春	江戸の名医に会う	
2016年春	江戸の本草家と出会う	
2017年春	脈に関する本	
2018年春	不老長生と医学 ー身体・服薬・煉丹術ー	
2019年春	長崎に関わる本 ー輸入西洋科学書と翻訳書ー	

これまで、当図書館のご利用者が閲覧なさった分野としては、最も多いのが、東洋伝統医学の書籍である。中心としては江戸時代に中国の書籍を和刻したもの、あるいは日本人が著した医学書となるが、明、清時代の漢籍を閲覧なさる人もあった。次には眼科の古い書籍である。これには写本の多い日本の秘伝書の類や、中国で著された眼科を含む医学叢書がある。そして、これは当館の特徴とも思えるが、伝統医学の医師たちが西洋医学を受け入れていく段階の書籍も多い。西洋医学の解剖書に触発された日本人医師たちは刑死した者などの腑分けをして人の身体を捉え直したが、そうした時代の本も多く閲覧されている。また、医師や鍼灸師といった医療関係の方々のほか、古活字や抄ものなどの書誌学や国語学、文学などの研究者の方々のご利用も多い。古活字版の研究で有名な川瀬一馬氏も研医会図書館の書物を調べられたし、幕末から明治にかけての語学関連の書籍については杉本つとむ氏もたびたび訪れて調査をなさっていたと前任者から聞いている。

本の展示会で残念なことは、なかなか手に取って本の全部のページをご覧になっていただけないことである。解説のポイントとなるページを開い

てお見せするだけとなるので、本として読んでいただけないのが心苦しい。そこで苦肉の策として、見て楽しいもの、挿絵や図表のあるような本を選んでしまう。本草書などは美しい植物の絵などがあるため、格好の展示品となる。そういった意味では展示会に使った本は偏っているかもしれないが、直感的に当時の人々が捉えていたものを私たちが把握できることはやはり捨てがたい。挿絵で興味を持っていただき、次にじっくり文章を読んで書物と向き合っていただけるとありがたいと思う。

江戸時代の東洋医学の本とわが国に西洋医学が入ってきてからの資料が併存していることは、当館の面白い特徴かと考える。両者の人体の捉え方の違い、臓器の描き方の違い、利用する薬物の違いなど、書物の世界で東西の文化がせめぎ合っているようだ。人類は、こうした文化のぶつかり合いの中から新しいものが生まれてくるという経験をしている。一見古いものと見える書籍ではあるが、再度新しい角度で見て行けば、新たな発見がないとも限らない。その思索のための現代の参考書も少しずつ増やしてきた。地域史研究、文化研究、哲学、宗教などの研究書もあり、古書とともに利用可能となっている。(館内閲覧)

コロナの流行以降、展示会は行っていないが、今後はウェブ上での公開など考えていきたい。現在、研医会図書館のホームページの「画像のある書籍目録」には600近い冊数の本の画像リンクを用意している。また、国文学研究資料館の研医会分の画像は、594タイトルが公開されている。是非こうした画像資料を利用して、ご研究を深めていただきたいと願っている。書籍目録にあって、画像資料が見つからない場合はお知らせいただければスキャンを行って公開するので、メールなどでお知らせいただきたい。

これまでもパンダのぬいぐるみとともに中国語の礼状が届いたり、イギリスやドイツ、韓国の研究者から問い合わせがあったり、香港の研究者から画像データの不備に関して指摘されたりと、日本だけではなく、海外の研究者も当館の資料を使ってくださっていることがわかっている。こう

したことを経験して、探している人にはウェブ公開が貴重なものであると信じられるようになった。これからも積極的に書籍の画像を公開して、

ご利用の方々への便宜を図っていく所存である。

(令和4年10月例会)

郡上医学の夢～美濃郡上藩の医師修業 同地方の江戸期医事

森永 正文

郡上八幡は古来より東海北陸地方の交通、軍事上の要衝とされ、狭溢な地に関わらず数多くの大名の転封が繰り返されている。その一つである青山家は郡上宝暦一揆のため御家断絶となった金森家3万8千石の後を受け、1759年、丹後宮津より郡上に入部した。美濃、越前の両国にわたる4万8千石である。戦後の地方史ブームのもと刊行された『郡上八幡町史』史料編(全7巻)には、『青山家家臣由緒書』として青山家の転封に付き従った家臣506家及び中途での断絶100家の、計606家の家系と勤め方が記されている。郡上藩医の経歴についての詳記もある。

1. 美濃郡上藩の医師修業

1781年、城下八幡柳町に儒医家出身の江村北海を館長とする藩校(郡上講堂、号は潜龍館)が開学した。同じ頃、天明年間に江戸講堂が開設されたが、『家臣由緒書』には1795年に定府藩医林元仲が藩医学教育に功労があったとして褒賞を受けたとされる記述があり、これより先、江戸講堂に医学講座の開かれていたことも推察される。また、国元郡上では儒医杉岡道啓、内科・外科臨床医杉岡良作がそれぞれ第2代、3代館長を務め、父子のあいわたる藩校職歴は1820年以來のべ10年近くにも及んでおり、郡上講堂での医学教育の嚆矢となった可能性もある。その後、1838年には国元藩医浅井家九代政時が潜龍館の「重立取引」に就任している。なお、味岡門下四傑の一人、浅井周伯は同家三代にあたる。幕末の1858年ころ郡上郡で赤痢、腸チフスの伝染病が蔓延したことが

ら、藩主青山幸哉公はこれを機に西洋医療に力を入れ藩校に医学の講座を設けるとともに優秀な人材を江戸に派遣している(『郡上郡医師会史』高橋教雄氏)。郡上藩校は江戸校、郡上校の二元化したものであったが、幕府崩壊による定府藩士の帰国を契機に一元化して、1868年6月には文学・武学の科目に新たに医学・洋学を加え藩校名も集成館と改称した。明治3年6月八幡本町に集成館医学科の別館として種痘・施療の臨床を行う医学所が開設された。この医学所はのちに医学寮、医学校と名を変えている。しかし、廃藩置県により明治4年11月集成館は閉校となった。藩医学教育という藩内医師修業のほか、医師の数々の他国医学修業、すなわち藩外での医師修業がみられる。江戸期(幕末まで)の代表的な遊学生として湊宗有(京都伊良子家)、林元仲(池原長仙院(雲伯))、中泉松庵(幕府西洋医学所)の3例があげられる。維新時には4名が藩費遊学生として東京に派遣されている。これら若きエリート達に託された「郡上医学」の夢も明治4年7月の廃藩置県によりついでた。『各藩医学教育の展望』(山崎佐著)の「郡上藩の項」に、【明治二年「藩政定別」を制定しその中「医者には常に学校に出ることと心得べし云々」とて、医師の勉学を命じている。】との記述がある。法令を出してまでも、医師となるものに対して藩では医学修業を勧めていたことがわかる。郡上藩が医師教育、医師修業の重要性を認識していたことを改めて再認識させられる。